



橋宿翔あり者韻鏡開查を作り其末あり巻に九弄を去る也  
注解より水水大低を去りし相知は極れも以て之を得ず合意也  
之所を無理あり注詳お見ししか就中弄音を去るべき所あり  
九弄經字の錯雜下流字を只書高き流しに注し其流又  
五箇に吾國も合得べき所方國も作り以て釋きし也く水  
重道と申事一切會道と考へ故是以省き去り改て逆反の  
事をして是れ其の極務ありし其後九弄を去るべき所あり  
三四の弦餘弦を説世より初めゆくと以て九弄を釋  
する事ありしと字を去り指南に隱へるあり近年沙門盛興  
作下九弄和解二卷附乃外委細に注釋を以て是れ大旨也

開查の模範を因ひ其の自ら料首を加へ十紐を以て十二紐有之  
由記さしに到及といふ事余ゆきも以て九弄を作り改り亦  
傍紐と云ふと曲經字ありしを去り流の事也相合し深り  
其の上雙字を疊韻と名自以て引連し理を極出  
之より元來雙字を疊韻と字義とて之を去りし是也  
指南に成るるもの極小諸家の多し存あり九弄を根本  
仍り考ふ所存あり是又何し其圖なるや云ふ外と論流下  
又五箇の圖を去りし成有極ありて去るるも其事會道  
人たる者も其の少し等小工を去りて後明政一水公九弄  
録廢し申切と云ふ也

四聲五音九弄反紐圖序 沙門神珙撰

夫文物之國假以詩書七步之才五音為首聿興文字反切為  
初一字有訛餘音皆失四聲之體與天地而齊生宮商角徵羽  
之音與五嶽而同起且天地生於混沌不同混沌之初君子生  
於嬰兒豈與嬰兒同類夫欲反字先須紐弄為初一弄不調則  
宮商靡次昔有梁朝沈約創立紐字之圖皆以平書碎尋難見  
唐又有陽竇公南陽釋處忠此二公者又撰元和韻譜與文約  
義詞理稍繁淺劣之徒尋求難顯猶如七七多久之字寫人會  
有改張紐字若不列圖不肖再傳皆失今此列圖曉示義理易  
彰為於韻切之樞機亦是詩人之鈐鍵也譜曰平聲者哀而安

極清也  
極濁也  
極清也  
極濁也

上聲者屬而舉去聲者清而遠入聲者直而促傍紐者皆是雙  
聲正在一圖之中傍出四時之外傍正之目自此而分清濁也  
故列五箇圓圖者即是五音之圖每圖皆從五音字行皆左轉  
中有註說之又列一箇方圖者即是九弄之圖圖中取一字為  
頭橫列為圖首目題傍正之文以別之

五音聲論

東方喉聲 何我剛譌 西方舌聲 丁的定泥  
寧亭听曆 南方齒聲 詩失  
之食  
止示 勝識 北方脣聲 邦厖剝電  
北墨朋邈 中央牙聲 更硬牙格  
行幸亨客

九弄圖不林琺の多父を附くも水大低文章卑俗より所  
不成語ありて流びごとく水名流大之の字をかゝる事はよく之



意の同し一の字に二の字を充九音の正紐傍理少し十六音を調へ  
その物少し之を元反切乃文字を作る者一指へる九音  
をわたりて又を韻鏡と名けり其の基本も成る也  
あはれ神珠のしき他より如く字音瓜反切して正音と知る意の  
用也之をゆるい思ふ端りして正音と名けり乃圖も亦同し  
乃物少し之を元反切の神珠も九音圖十紐圖を作さる如く此等も  
其用は標をいふに今も其意を失くさんし其神珠を世に韻鏡  
綴録と名けり由り傳へるも如く此等も其の韻鏡は神珠之  
等より反切鏡と他者を神珠と一の字を旨証し其極能生も字  
彙直字の序に神珠を韻鏡は他者乃標少し一五九の字を  
九音の初小五音を滿を載らしきるはし韻鏡は他者より見  
難し其韻鏡は七音を多く二十六母を定む其神珠は音韻の  
を畫し其物少し今乃五音解論は元來粗なる物なり其  
相傳へる如く神珠は喉部の中に我剛諺河可案各乃字を以  
て得る皆韻鏡少し其牙舌の文字は神珠の牙舌如く  
行幸字を入るはし其は喉音と文の如し其是は元來喉  
系とし牙舌と喉音とを分る者少し其神珠の中義も亦  
此等一國の如く仰音ありて其字音も誤り多し其を  
守る小韻鏡を作らざる者少し其韻鏡一正一其の五音  
考滿之錯の外誤り多し其の誤り多し其韻鏡乃作者よりは

九音の初小五音を滿を載らしきるはし韻鏡は他者より見  
難し其韻鏡は七音を多く二十六母を定む其神珠は音韻の  
を畫し其物少し今乃五音解論は元來粗なる物なり其  
相傳へる如く神珠は喉部の中に我剛諺河可案各乃字を以  
て得る皆韻鏡少し其牙舌の文字は神珠の牙舌如く  
行幸字を入るはし其は喉音と文の如し其是は元來喉  
系とし牙舌と喉音とを分る者少し其神珠の中義も亦  
此等一國の如く仰音ありて其字音も誤り多し其を  
守る小韻鏡を作らざる者少し其韻鏡一正一其の五音  
考滿之錯の外誤り多し其の誤り多し其韻鏡乃作者よりは









宮舌居中 角舌縮卻



徵舌柱齒

之圖



五音

商口開口張 羽撮撮口聚



四聲五音九弄反紐圖



本圖ニ注セル意如此ナルノ三十六是只  
 正紐到紐ノ二反雙聲ノ二反疊韻ノ二反  
 アルヲ知ラレムルナリ下ヨリ上へ逆  
 反スルアルナレ

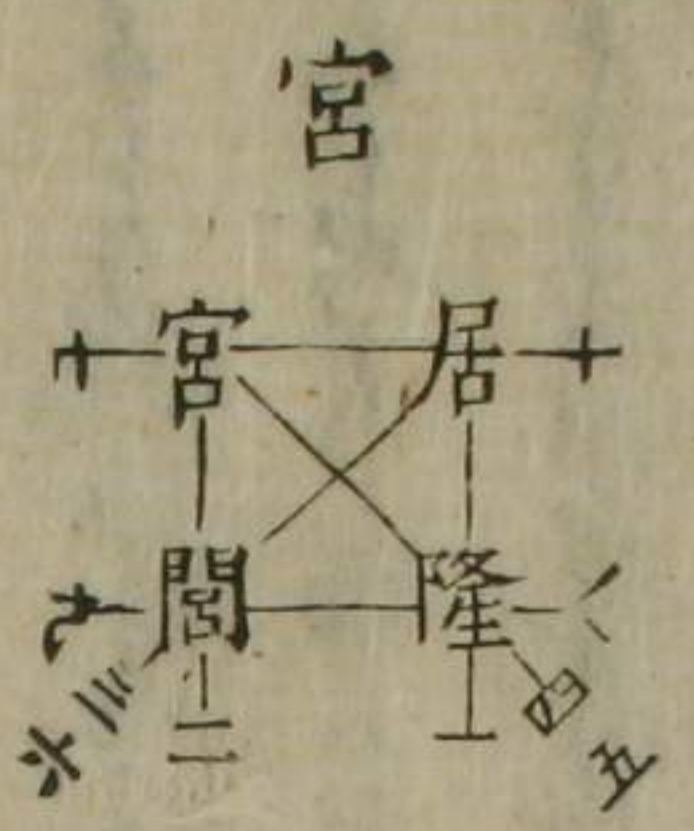
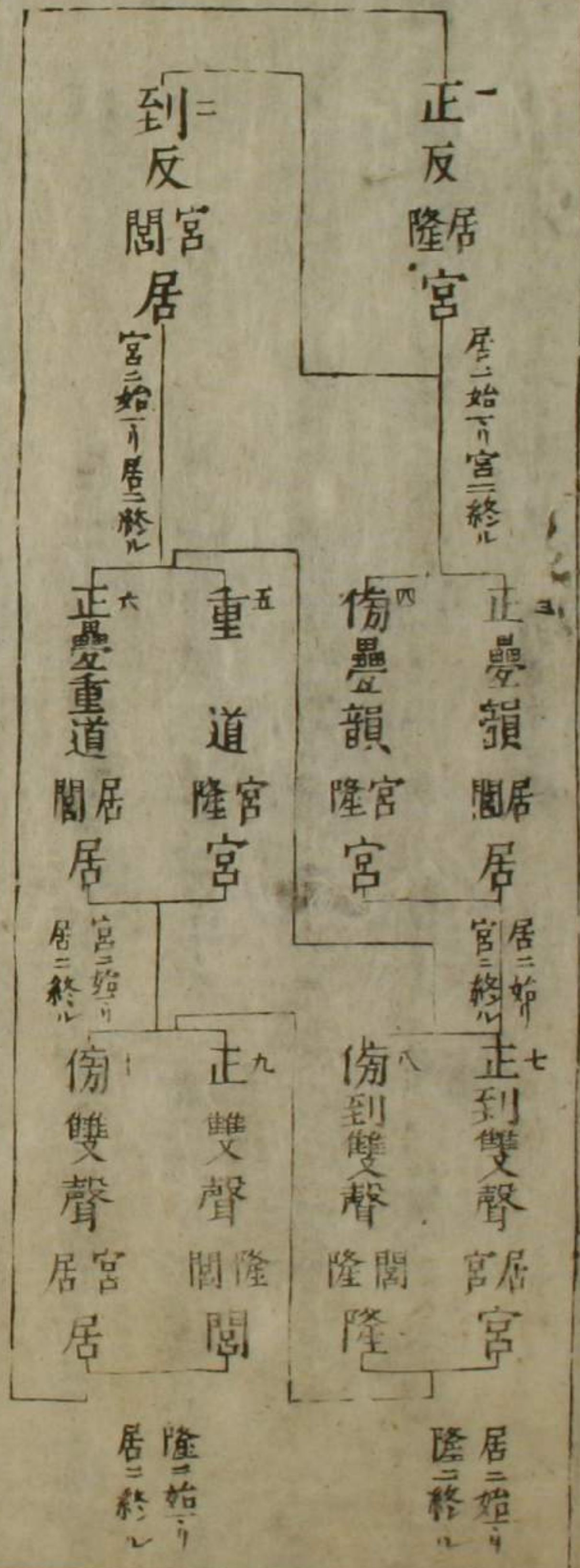
中始到の字と同をさし或は到と倒と同音なるを例に  
 意一因以採むおむるが如く倒と下より上へ反切する  
 音の字の讀ぶ乃逆反を以て又到の字を直に取て倒の字  
 以て之を以て料簡少し此書に聲韻圖の重脩廣韻の五音  
 集歌字にも載て居る皆到の字なり考へ見よ一又雙聲平聲  
 の字も亦物に於て有るも聲韻圖の如く改第する少し

以下四音五音九音反紐圖と曰四音と九音と後亦五音と亦道  
五音と反紐とあり一音之圖と曰五音高角微相皆同格と  
其一の八音會得の字餘ハ左のつゝおぢは二音ハ先五音は字  
を呼指南を記せんハ宮音辰申と音子張角古諸節 激舌  
柱五羽振台音ハ何の音ハ善音乃呼法音ハ其呼法ハ音少ハ  
相通する様ハ善ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
唐音ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
呼ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
通法ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
左ハ可ハ喉ハ咽ハ舌ハ唇ハ

録下する事一の字と稱一ハ六と宮乃字より侍紐を下し  
宮經ハ王居一ハ言乃字物ある一東張款ハ隆乃字をより居  
隆地を作り音ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
とよりハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
二ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
三ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
四ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
五ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
六ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
七ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
八ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
九ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ  
十ハ何の音ハ善音ハ其呼法ハ音少ハ

予の事。此中に正侍と名付く在才の正なる呼ばぬ。を平し在  
乃るを呼ばぬを備へありや。或る宮乃其れ為小御と  
表面の取切中此して表面に没すたる取切中。亦其を備  
し。亦其を呼ばぬ。○第五の事。○第六の事。○第七の事。○  
之れを呼ばぬ。○第八の事。○第九の事。○第十の事。○  
第十一の事。○第十二の事。○第十三の事。○第十四の事。○  
第十五の事。○第十六の事。○第十七の事。○第十八の事。○  
第十九の事。○第二十の事。○第二十一の事。○第二十二の事。○  
第二十三の事。○第二十四の事。○第二十五の事。○第二十六の事。○  
第二十七の事。○第二十八の事。○第二十九の事。○第三十の事。○  
第三十一の事。○第三十二の事。○第三十三の事。○第三十四の事。○  
第三十五の事。○第三十六の事。○第三十七の事。○第三十八の事。○  
第三十九の事。○第四十の事。○第四十一の事。○第四十二の事。○  
第四十三の事。○第四十四の事。○第四十五の事。○第四十六の事。○  
第四十七の事。○第四十八の事。○第四十九の事。○第五十の事。○  
第五十一の事。○第五十二の事。○第五十三の事。○第五十四の事。○  
第五十五の事。○第五十六の事。○第五十七の事。○第五十八の事。○  
第五十九の事。○第六十の事。○第六十一の事。○第六十二の事。○  
第六十三の事。○第六十四の事。○第六十五の事。○第六十六の事。○  
第六十七の事。○第六十八の事。○第六十九の事。○第七十の事。○  
第七十一の事。○第七十二の事。○第七十三の事。○第七十四の事。○  
第七十五の事。○第七十六の事。○第七十七の事。○第七十八の事。○  
第七十九の事。○第八十の事。○第八十一の事。○第八十二の事。○  
第八十三の事。○第八十四の事。○第八十五の事。○第八十六の事。○  
第八十七の事。○第八十八の事。○第八十九の事。○第九十の事。○  
第九十一の事。○第九十二の事。○第九十三の事。○第九十四の事。○  
第九十五の事。○第九十六の事。○第九十七の事。○第九十八の事。○  
第九十九の事。○第一百の事。○

是れは正侍と名付く在才の正なる呼ばぬ。を平し在  
乃るを呼ばぬを備へありや。或る宮乃其れ為小御と  
表面の取切中此して表面に没すたる取切中。亦其を備  
し。亦其を呼ばぬ。○第五の事。○第六の事。○第七の事。○  
之れを呼ばぬ。○第八の事。○第九の事。○第十の事。○  
第十一の事。○第十二の事。○第十三の事。○第十四の事。○  
第十五の事。○第十六の事。○第十七の事。○第十八の事。○  
第十九の事。○第二十の事。○第二十一の事。○第二十二の事。○  
第二十三の事。○第二十四の事。○第二十五の事。○第二十六の事。○  
第二十七の事。○第二十八の事。○第二十九の事。○第三十の事。○  
第三十一の事。○第三十二の事。○第三十三の事。○第三十四の事。○  
第三十五の事。○第三十六の事。○第三十七の事。○第三十八の事。○  
第三十九の事。○第四十の事。○第四十一の事。○第四十二の事。○  
第四十三の事。○第四十四の事。○第四十五の事。○第四十六の事。○  
第四十七の事。○第四十八の事。○第四十九の事。○第五十の事。○  
第五十一の事。○第五十二の事。○第五十三の事。○第五十四の事。○  
第五十五の事。○第五十六の事。○第五十七の事。○第五十八の事。○  
第五十九の事。○第六十の事。○第六十一の事。○第六十二の事。○  
第六十三の事。○第六十四の事。○第六十五の事。○第六十六の事。○  
第六十七の事。○第六十八の事。○第六十九の事。○第七十の事。○  
第七十一の事。○第七十二の事。○第七十三の事。○第七十四の事。○  
第七十五の事。○第七十六の事。○第七十七の事。○第七十八の事。○  
第七十九の事。○第八十の事。○第八十一の事。○第八十二の事。○  
第八十三の事。○第八十四の事。○第八十五の事。○第八十六の事。○  
第八十七の事。○第八十八の事。○第八十九の事。○第九十の事。○  
第九十一の事。○第九十二の事。○第九十三の事。○第九十四の事。○  
第九十五の事。○第九十六の事。○第九十七の事。○第九十八の事。○  
第九十九の事。○第一百の事。○

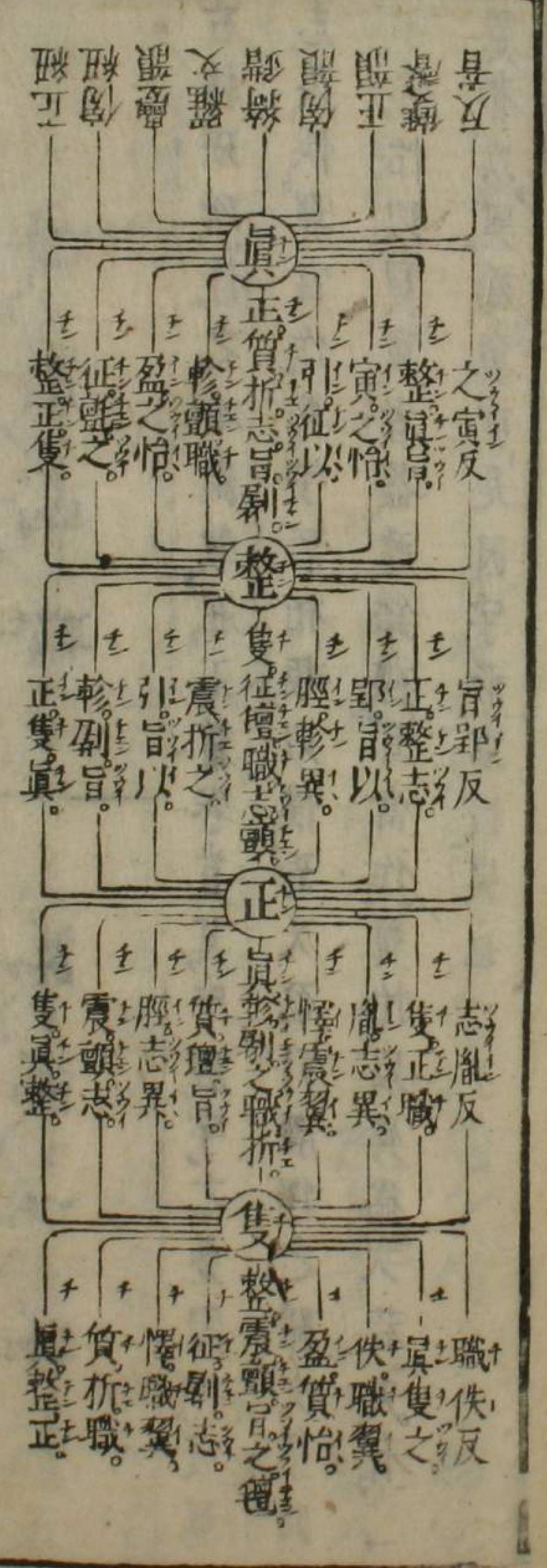


宮ノ音ノ爲ニ居隆反ヲ作ル故ニ音ヲ生スルハ常ニ居ヨリ  
始ル廻リテ本ニ歸ス本ノ居ニ歸スレハ音ヲ生セス故ニ一廻  
十反レテ一周圓圖ヲ作ル  
一ニノ反ニテ居ニ歸ル一廻トス二三四五六ノ反ヲノレテ  
居ニ歸ルヲ再廻トス七八九十ノ反ヲナレテ居ニ歸ルヲ三  
廻トス

如ク三四の修めてハ如ク居隆反ノ如ク  
て亦の居隆反ノ如ク半ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ  
居ニ歸ルヲ再廻トス七八九十ノ反ヲナレテ居ニ歸ルヲ三  
廻トス

如ク三四の修めてハ如ク居隆反ノ如ク  
て亦の居隆反ノ如ク半ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ  
居ニ歸ルヲ再廻トス七八九十ノ反ヲナレテ居ニ歸ルヲ三  
廻トス

四變ありとありの陰陽地を陰都連関とありの○第十傳雙志  
 とあり方よりありの陰陽地を陰都連関とありの○第十傳雙志  
 此也且第七第八少人陰陽の終りて奇偶生るる理を失はざる  
 第九第十を用いなく本の居乃多入坤し尸半の三回一周の  
 本此右の言ふ坤一の居乃又此右居陰一陰陽一白陽一陰陽  
 ありを表し一圓と一割と一陰陽一陽陰一陰陽一陽陰一陰陽  
 是を指減するをのりさふ事



乙未年

羅文反樣

之	氈	征	眞
旨	劇	軫	整
志	顛	震	正
職	折	質	隻

翼	快	懼	懼
翼	見	懼	懼
以	以	以	以
怡	疑	疑	疑

右神珙所作之本圖載在玉篇卷首其中懼字之疊韻作震翼志蓋快翼當作異字形相類以懼焉又盈引懼懼之羅文第四字作怡以翼翼者蓋遞錯襍耳當作翼怡以異爲次若夫有二翼者以異爲翼亦是因字形寫快矣也

次九弄之其整正隻引懼懼乃字以圖を作りて其意致さ其の是元反切を製す不拙て切款二字一預る音稍羅網乃不しく展轉して相成を爲すある事を出さず其の音其中心文字錯雜しく誤り多かるものなり其本神珙の唐代の俗字なり其後ハ皆々字造を移す一ありて諸字各自色乃發明は極なり其本一其是の單若かりし其本神珙の唐代の俗字なり其後ハ皆々字造を用ひて他々作らば其音少くは協し字皆なり其唐音も其の杭州音と大抵異なる事あり其杭州音も其の音も其の國字と別異あり通し文字の中其通し可も音も通し其改め替へるの發明あり極なり





さくくまりと評されし可なり其と云はれ再考におもひに  
因字別 のりく讀みたる正細叶のしりふ○第一傍紐の六  
同類乃百四を引ぬるなり其に同類を征記之れは他類を  
誤記書に載りしを細紐と云ふ物少しは心違ふ許す録る音ある  
同類の中他類を求めり時之の音減消と傍紐を伝へり此傍紐  
聖體字ありやP字とて合點不齊し可い新小九并を傳りり  
傳り 安本の和字くす中ノ聖體字に充輝と列補と下字  
音韵論にありしや其を充輝と列補に充輝と列補に充輝と  
又九并同よ入ありは使實折破と列のりと思ひて其をなく  
同類の中やなり○第一傍紐の六と云ふ字之類と云ふは此傍紐

傍紐の一字くす物なきなる切する小言整と其と云ふは  
古評し古註し其之と云切するなり其皆各下字少ゆり  
今聖體と云切は其の切するなり今聖體は此傍紐の  
字ありしや下りあるは此傍紐の字ありしや今聖體は此傍紐  
字ありしや之と云切するなり今聖體は此傍紐の字ありしや  
今聖體は此傍紐の字ありしや今聖體は此傍紐の字ありしや  
今聖體は此傍紐の字ありしや今聖體は此傍紐の字ありしや  
今聖體は此傍紐の字ありしや今聖體は此傍紐の字ありしや  
今聖體は此傍紐の字ありしや今聖體は此傍紐の字ありしや  
今聖體は此傍紐の字ありしや今聖體は此傍紐の字ありしや  
今聖體は此傍紐の字ありしや今聖體は此傍紐の字ありしや



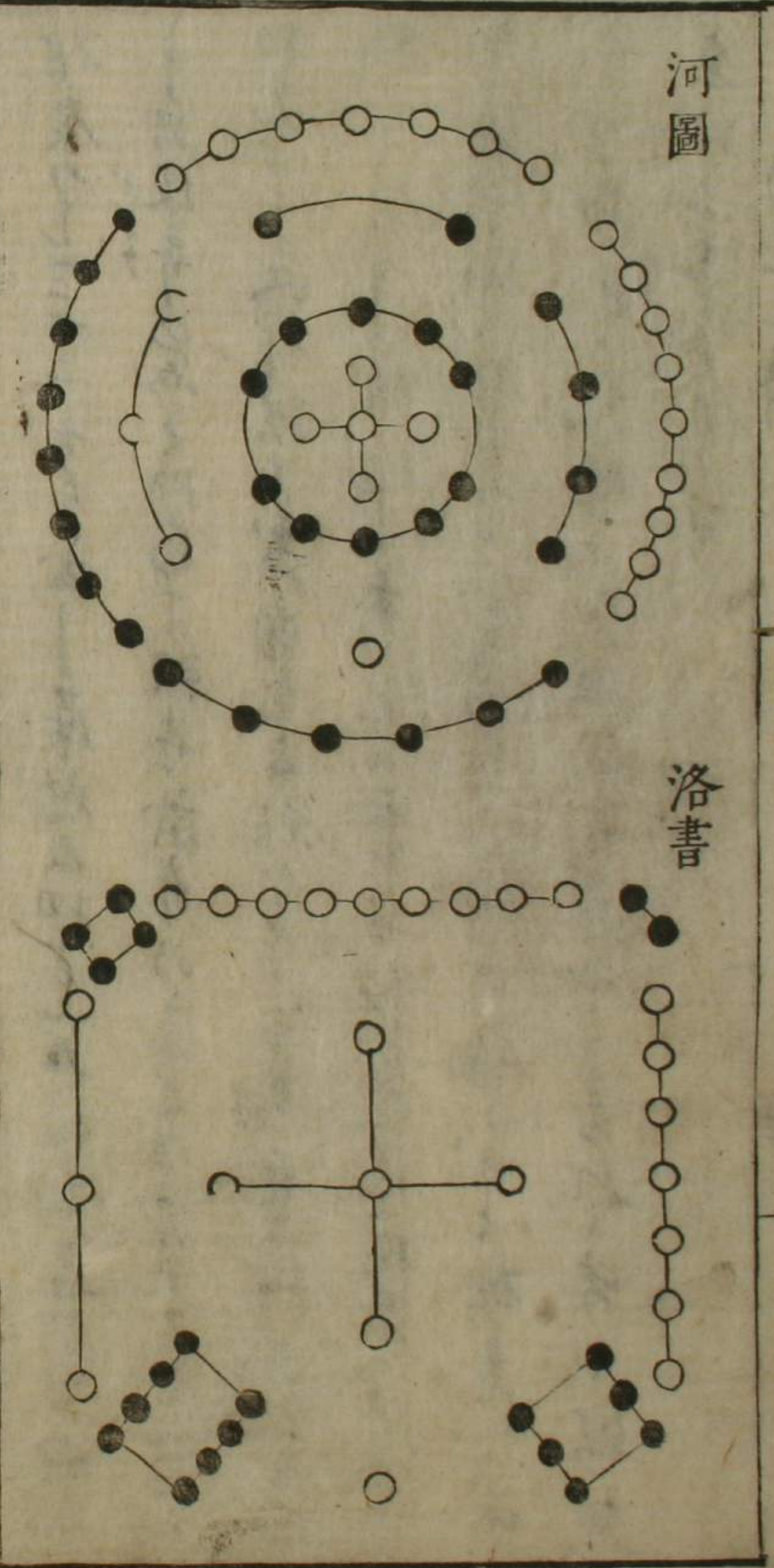




及こゝの所より九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 中よりお志の如く九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 なるも信くしは角と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 を依り置れ共の神珠の字は叶印の海と合意は七弄將來の九弄圖を  
 沈約の依る由らばとも云く九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 前以辨くしは角と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 授る事くおん出の九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 十の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 尚ら論じて圓珠の如く九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 ありて角乃家も是自然の理あり九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と

其圖を依りてするは九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 ぶゆり物とする事しは沈約九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 一の用と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 推廣して三十三音を成一一原格反切して九種有名自を成一  
 中只反弄の如くは九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 お見ん、トト又神珠の如くは九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 根えりて易装起る事しは九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 音韻分格、事しは九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 あり、事しは九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と  
 志の如く事しは九弄の格と方圓の管とを以て改め依り共後と

河圖ハ伏羲氏龍馬ノ圖ヲ負フヲ得テ因テ卦ヲ畫シ萬世文字ノ祖トナリ  
 洛書ハ大禹ノ時神龜洛水ニ出ツ其背ニ朱紋丹字アリ之ヲ折スルニ書ノ如シ  
 故ニ洛書ヲ製シ九疇ヲ叙ス邵康節曰圓者河圖之數方者洛書之文ト此ノ  
 說アリトイヘ古今其圖ヲ作ルヲ見ルニ河圖洛書共ニ方形ニ從フ蓋シ非  
 ナリ今ノ圖ハ清ノ孫枝秀カ百體千字文ニ出タリ河圖ヲ圓トシ洛書ヲ方トシ  
 是トスヘシ



上ノ本五本抄をのこす解と強しんをとり下は世系の標を記  
 一ノ本を先子志小逆なる子をえられたりハ居座宮乃  
 三字を本本乃と問の字何より此字今海内くせれ正逆反  
 正し授も無たりをハ出たりしをを無理に文和朝朝額溢り  
 後朝成向とありたり付係ハ額係ハ義ありとはなる逆反と作り  
 抄りし無しとせ来新書教信小信魏と書ハも神理と云々と  
 名付も今同中ノ逆反の字ハハ付付到ハ信の字ハ忘るは  
 又神信の信乃字却くをある事ハも是來たハハハも今反  
 ふ事ハも神信在授する事ハも是來の字ハも神信とあり  
 らす

九孫神





















